「日本と東欧・スラブ・ユーラシア関係史研究会」発足

本年２月１日に学習院大学の井上寿一学長をお招きして、「日本の国際連盟外交　―スラブ・ユーラシア世界の成立と日本外交―　」と題する講演会を開催いたしました。井上先生の近著に描かれた東欧世界と日本外交の邂逅は、東欧史研究者にとって重要な課題です。しかも 1982 年の東欧史研究会による「日本・東欧の文化交流に関する基礎的研究」が、それ以降にむしろ十分に発展、継承されていないという東欧史研究上の問題が浮かび上がりました。第一次世界大戦に関する日本史と西洋史の協働が必要である事を同学の家田裕子が提唱し、また長與進氏が新資料に基づくチェコスロヴァキア軍団研究を精力的に進めておられること、さらに高弊秀知氏が両大戦間における日本とハンガリーの思想史的相関の今日的意義を検証されるなど、幅広い関連領域で新しい挑戦や取組みが進展しつつあります。こうした動きを繋いで、広い視野から全体を俯瞰しようとする学問的対話の機運が活性化し、研究会の発足が期待されるなかで、幸いなことに、平成 27 年度科研費挑戦的萌芽研究として**『東欧世界の成立と日本：日本・東欧関係史の再構築と新たなスラブ・ユーラシア史』**（家田修研究代表、平成 27–29 年）が採択されました。概要は以下に示しますが、日本と東欧の関係を双方向で探究する作業の中から、世界史に新基軸を提示することすら可能であろうという大きな構想を立てております。「日本と東欧・スラブ・ユーラシア関係史研究会」を立ち上げ、日本史、東欧史、広くスラブ・ユーラシア史にまたがる学際的な議論を広げてゆく所存です。

趣旨

スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）地域は第一次世界大戦、ロシア革命とソ連の成立、東欧諸国の独立という一連の世界史的出来事によって誕生しました。同時期に日本は明治以来の近代化の歩みの中で帝国成立を自覚し、有力なグローバル・パワーとして行動し始めます。西欧を中心とする近代世界秩序は、第一次世界大戦によりいったんは崩壊し、「西欧の没落」を西欧自らが語りはじめるようにさえなりました。他方、スラブ・ユーラシアと日本ないし東アジアには新秩序が胎動し、スラブ・ユーラシアと日本の間では多様な局面で、また様々な人物によって新たな世界秩序形成が模索され始めます。

中でも日本と東欧の関係は、従来あまり光が当てられませんでしたが、まさ

に互恵的な新世界の秩序形成と呼ぶに相応しいものでした。日本外交は第一次世界大戦後に生まれた東欧世界に対して積極的に関与し、東欧地域も新しく「列強」に仲間入りした日本に強い関心を抱いて、実際に国際連盟等を通して互恵的関係が築かれたのです。第二次世界大戦と続く冷戦により、この日本・東欧関係は中断されますが、双方に史資料や史実が豊富に埋もれており、検証に値する歴史と言えます。かつて国内外の東欧史研究の先輩たちは、この相互関係史の輪郭を示唆しておりました。我われは今ここに、日本外交史研究の新たな展開に刺激され、埋もれた歴史の再発掘を促されているかにも思えます。

日本と東欧及びスラブ・ユーラシアの関係史は、究極的には世界史的文脈の中に位置づけられるべきものです。新しい世界史像を生み出す予感すらあります。こうした将来像を見据えつつ、共に基礎を築き、若い世代が本研究を継承・発展させていくことを願っています。専門とする地域は日本やスラブ・ユーラシアとは限りません。地域を越えて、領域を越えて、オープンで協働的な研究を行いましょう。関心のある方がたの自由なご参加を、心から歓迎いたします。

家田修